
発進！！最凶マスコットせん○くん

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

発進！！最凶マスコットせん○くん

【Nコード】

N7859H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

古今東西稀に見るかわいくなさ、気持ち悪さのあのマスコット。天本博士は何とそのマスコットを殺人マシーン、巨大ロボットとして開発し古都に向かわせる。途中殺戮の限りを尽くしながら進むマスコット達を止めるのは。大長編天本博士シリーズ第二弾、今回は『対決！！』の今田先生と今日子先生も出ます。なお某マスコットや某AAキャラと似ているかも知れないというのは気のせいにおいて下さい。

第一章

発進！！最凶マスコットせん〇くん
今巷では。あるマスコットが注目されていた。

注目といってもいい意味ではない。実に悪い意味でそのマスコットは注目されていた。しかもそれは日本中での話になっていたのだった。

「このマスコットなあ」

「最悪！？っていうか最凶！？」

いきなりここまで言われる始末であった。

「可愛くないっていうかねえ」

「不気味っていうか」

不気味と言われるマスコットキャラも滅多にない。少なくともそれは妖怪変化に対して向けられるような言葉ではあってもマスコットキャラに対して向けられる言葉では決してなかった。

しかしそれでも人々はそのマスコットキャラを見て。また言うのだった。

「可愛くないよねえ」

「気持ち悪いって」

「あれでよく採用されたよ」

「採用した人何考えてたんだろうね」

ここまで酷評されるのだった。そしてその酷評のままさらにグッズまで売られる。売る方も最早逆の意味で注目されていることを利用するしかなかった。

「だからこんなのが映ってるカップで飲んだら食中毒起こすって」

「グッズも不気味だし」

何をやっても不気味という妖怪に対する評価は変わらなかった。

「着ぐるみになってもねえ」

「やっぱりキモイんだよね」

とにかくぼろくそに言われ続けている。その無茶苦茶な評価はあの天本博士の耳にも入っていた。まずは小田切君達が研究所のコンピュータでネットサーフィンをしている時だった。なお博士はこのコンピュータで普通にありとあらゆる国にハッキングし極めて悪質なウィルスを流したりする。これも博士の破壊活動の一つである。

ネットの記事を見ながら小田切君は。ライゾウとタロに対して言うのだった。

「何時見てもこのマスコットはねえ」

「可愛くないよな」

「そうだね」

彼等もこんな意見であった。

「何でこんなのにしたんだろうね」

「選んだ奴のセンスがおかしかったんだよ」

「お酒飲みながら選んだとか？」

ライゾウもタロも実に容赦がない。

「そんなところだよ、これって」

「とにかくこんなの普通はマスコットキャラにしないよ」

「その通りだよ。その一家にしろ」

調子に乗って一家まで作ったのである。それがさらに不気味だと評判であった。人間悪ノリ、開き直りをすれば何処までも暴走するものである。

「これまた何かねえ」

「ゲゲゲの鬼太郎だったら絶対に攻撃されてるよな」

「あの髪の毛の針が飛ぶね、絶対に」

「だよ。やっぱりマスコットキャラは見えないよ」

モニターに映るそのキャラを見ながらまだ言う小田切君だった。

「これはとてもね」

「いや、中々いいのう」

だがここで。不意に後ろから声がしたのだった。パソコンのサイ

ズに収めた博士が設計、開発したスーパーコンピュータの席の後ろで。

なおこのスーパーコンピュータの性能はまさに神である。たった一台で全世界に災厄を与えることが可能な程のコンピュータである。

そのモニターに映る新しい顔は。やはりこの人であった。

「博士、お昼寝中だったんじゃない？」

「今起きたのじゃよ」

こう小田切君に答える博士であった。

「今しがたのう」

「そうだったんですか」

「前に少し考えておったんじゃないがのう」

話を単刀直入に切り出す博士であった。

「このマスコットキャラじゃ」

「はい。全然可愛くないですよね」

「じゃがそれがいい」

ここでこう言い出す博士であった。

「それがのう。実にいいのう」

「こんなのがいいんですか？」

「巨大ロボットには丁度いい」

モニターに映るその不気味な姿を見ながらの言葉であった。

「前に言ったが戦闘員のように大量に作るのも考えておる」

「巨大ロボットだけじゃなくてですか」

「それだけでは面白くない」

これが博士の行動の根幹であった。面白いかそうでないか、この博士はそれを基準にしてありとあらゆる災厄を引き起こしているのである。

第二章

「じゃからちゃんと人間サイズも造るぞ」

「ちゃんとですか」

「わしは完璧主義なのじゃよ」

誰も望んではない完璧主義である。

「じゃからな。こうして人間サイズのロボットも造るのじゃよ」

「それでどれだけ造るんですか？」

「千体じゃな」

また随分ととんでもない数字であった。

「それだけは造るぞ」

「また迷惑な数を作るよなあ」

「全くだよ」

千体と聞いて顔を顰めさせざるを得ないライゾウとタロだった。

「それだけ造ってまた碌でもないことするんだろうな」

「いつも通りね」

「巨大ロボは一体じゃ」

「一体ですか」

「ただしその一体はとりわけ強力なものにする」

何の手も抜かない博士だった。やはり余計な完璧主義である。

「では。今から開発と製造に取り掛かるぞ」

「それじゃあ僕も行きます」

「ああ、それはいい」

小田切君が手伝おうとするのは止めるのだった。

「わしが全部やるからのう」

「だからですか」

「小田切君は電話番号をしておいてくれ」

これまた随分と楽な仕事を伝えられた。少なくともあまりにも危険な殺戮ロボの開発や製造に比べればかなり楽なのは確かである。

「朝の八時から夕方の五時までのう」

「それから後はどうするんですか？」

「電話は切るし来訪者にはロボットが応対する」

それで済ませるといふのだった。

「ヤクザ者や暴走族狩りのロボットを出しておいてのう」

「そんなの出したら危ないじゃないですか」

博士の開発したそうした人間狩り用のロボットは実に恐ろしい。

いざとなれば相手をミンチにしてしまうこと位ざらということでもないロボットなのだ。博士は時々気が向けばそうしたとんでもないロボットを暴力団の事務所や暴走族の集会に送り込んで実験用の素材を調達させたりさらに気が向けばそこで虐殺を行ったりするのである。

「あんなのを置いていたら」

「普通の来客ならそんなことはせんよ」

実に信用できない言葉である。そもそも世界でも最悪の危険人物の一人とまでされている博士の研究所に尋ねて来るまともな人間もまずいないからだ。

「まあ普通ならばのう」

「普通ならですか」

「暇ならネットでもテレビゲームでもしておるとよい」

これまた随分と気楽な話であった。

「それで電話番号をしておればよい」

「博士はその間に開発と製造ですか」

「二日じゃ」

期限も自分で区切ってきた。

「二日できる」

「二日ですか!？」

「左様、二日じゃ」

期限を聞き返す小田切君にまた答えるのだった。

「二日あれば巨大ロボットに人間サイズが千体できるわ」

「二日でそれだけできるんですか？」

それが極めて疑問であった。小田切君はいぶかしむ顔で博士に再度問うた。

「あの今から設計、開発して製造ですよね」

「うむ」

「それで千体って」

「まず設計と開発に一日じゃ」

それでまず一日なのだった。

「そして製造にな」

「一日ですか」

「これで二日じゃ」

言葉に出せばそれだけである。もっともその言葉の中にあるものは途方もないものである。だが博士はあくまで何でもないといたった様子のままであった。

「それで終わりじゃ。二日じゃ」

「本当にできるんですか!？」

小田切君はそれがとても信じられず再度博士に尋ねた。

「本当に二日でそれだけのことが」

「わしは天才じゃ」

有無を言わせぬ口調であった。

第三章

「そのわしにとっては一、二日なぞ些細な日数じゃ」

「そうなんですか」

「左様。だから安心して電話番号をしておいてくれ
本当にそれだけでいいというのである。

「食事はこちらで適当にやっておくからもう」

「インスタントラーメンとか冷凍食品とかファーストフードとかお
握りとか用意しますけれど」

「ああ、それはいい」

小田切君のこの申し出もいいというのである。

「わしはいざとなれば半年飲まず食わずでも平気じゃ」

「そうだったんですか」

「殆ど毒トカゲだよな」

「その域を超えてるね」

またライゾウとタロが博士の話を聞いてひそひそと話をする。毒
トカゲは何ヶ月も飲まず食わずでも生きていられるのだ。かなりの
生命力である。

しかし博士は。その毒トカゲ以上なのであった。

「だから安心していいぞ。二日程度ならもう」

「全然平気なんですね」

「食べるのを忘れておっても平気じゃ」

こうも答えるのだった。

「ついでに言えば二日程度の徹夜ものう」

「平気ですか」

「一月寝ないでも平気じゃ」

やはり人間の能力ではない。

「わしは死ぬことがないからのう」

「そういえば二百億歳でしたっけ」

小田切君は博士にその年齢のことを尋ねた。

「博士は。そうですよね」

「宇宙が出来た頃からおる」

堂々と言ってみせる博士だった。

「そのわしにとつて半年飲まず食わずも一月寝ないでものう」

「何てことはないんですね」

「ましてや二日寝ずとも食わずとも飲まずとも」

二日程度、といった口調だった。

「何ということはないわ」

「それで二日で全て終わられるんですね」

「左様。その間だけでよい」

その二日だけだというのをあくまで強調する博士だった。

「それではもう。今から全てに取り掛かる」

「ええ、それじゃあ」

これで博士はその設計から開発、そして製造に取り掛かることになった。残った小田切君達はとりあえずそのマスコットを見る。そのマスコットの姿とは。

「不気味な黒がかった黄色い肌にインド風の仏教の子供のお坊さんが鹿の角を生やしてにこりと笑ってるけれど」

「もうこれがな。最悪っていうかな」

「気持ち悪いよね」

小田切君はライゾウ、タロとこのマスコットを見て話すのだった。そのうえでこの不気味なマスコットが破壊兵器となることについて心の何処かで納得してもいた。

その二日後、運命の日。研究所のパソコンの部屋に出て来た博士はいきなり叫ぶのだった。

「全ては終わった!」

「終わったんですか?」

「そうじゃ、終わった」

いきなりこんなことを小田切君に言うのだった。

「この世がのう」

「何で終わるんですか？」

「見るのじゃ」

何の説明もしないで今の博士の言葉だった。

「外をな」

「外ですか？」

「既にわしの偉大な発明は外に出しておる」

博士は胸を張って言い切る。

「さあ小田切君よ」

「はい」

そして小田切君に対しても告げる。

「外に出てその偉大なものを見るのじゃ」

「たった二日でまたどうしようもねえの造り上げたんだな」

「本当に世界に迷惑をかける能力は凄いよね」

ライゾウとタロはその小田切君の足元で呆れていた。

「全くよ。この博士だけはどうにもならないよな」

「宇宙空間に送り込んでも帰って来るしね」

そのとんでもなさがまさに博士だった。二匹もそれを言ってもどうしようもないのがわかっていてもそれでも言わざるを得ないのだ。気分的に。

「まあとにかくよ」

「外ですよね」

「左様、外じゃ」

博士はライゾウとタロに対しても胸を張って告げる。

第四章

「外に出れば素晴らしい破壊兵器が待っておるぞ」

「そんなのに待ってもらってもな」

「仕方ないけれど」

「彼等の言葉は至極常識的なものだった。」

「まあそれでもどんなのができたのかな」

「見てみようかな」

「それで博士」

小田切君はいぶかしむ顔で博士に声をかけた。

「どうなったんですか？ 本当に」

「言葉通り千体できた」

博士は高らかに言い切ってみせた。

「サービスでもう千体造っておいた」

「つまり二千体ですか」

「そうじゃ。凄いじゃろう」

「そうですね」

あまりというか殆ど身の入っていない今の小田切君の返答だった。

「まあ二千ですからね」

「残念じゃが巨大ロボットは一体じゃ」

それは一体だというのだった。

「しかしじゃ」

「その一体に何かあるんですね」

「その一体にこれでもかという程詰め込んでおいた」

こう言うのである。

「まさにあのメカゴ○ラと同じ程にのう」

「それはまた随分と悪質なものですね」

小田切君は無意識に博士の開発したもの全てに抱いている感情を述べた。実際のところはこう感じているのである。しかし博士はそ

んなことは気にしてはいなかった。

「それはよいことじゃ」

「悪質なのがいいんですか」

「あえて世界や人類にとって迷惑なものを開発する」
博士は確信犯であった。

「だからじゃよ。悪質ならばそれでいいことじゃ」

「そうですか」

「そうじゃ。とにかく外じゃ」

またここで外に出るように勧める小田切君だった。

「外に出て見てみるのじゃ」

「はい。それじゃあ」

「行こうか」

「そうだね」

ライゾウとタロもそれに続く。こうして外に出てみた彼等が見たものは。一面に展開しているあの不気味なマスコットであった。

「うわ……」

「本当に一杯いるね」

その不気味なマスコットの軍団を見てライゾウとタロは思わずその顔を顰めさせて声をあげた。実に不快感に満ちた声であった。

「いなくてもいいのにな」

「本当に二千体いるかな」

「わしは嘘はつかん」

博士は決して嘘はつかない。悪夢のような兵器を開発することはあってもだ。

「決してな」

「じゃあ本当に二千もいるのかよ」

「僅か二日で造るなんて」

「何度言うがわしの辞書に不可能はない」

この博士がそんな能力を身に着けていると世界にとって実に迷惑である。

「二日あれば充分じゃった」

「そうなのかよ」

「充分だったんだ」

「そしてじゃ」

博士はさらに言うのだった。

「巨大ロボットはじゃ」

「ああ、そういうば」

小田切君は巨大ロボットの話が出たところでその外を見回した。しかし見たところそうした剣呑極まるものは何処にも見えはしなかった。

それにほっともしていたが。とりあえずその二千の不気味極まるマスコット達を見回しながらまた博士に対して尋ねる小田切君だった。

「何処に隠れてるんですか？」

「切り札はここぞという時に出すものじゃ」

何故か切り札になっているのだった。

「今のはう。あえて言わん」

「そうですか。ここぞという時ですね」

「そうじゃ。まあとりあえずはじゃ」

その二千もの不気味なロボットを見て邪悪な笑みを浮かべる博士であった。

第五章

「この人間の大きさのロボット達をじゃ」

「動くんですよね」

「無論じゃ。見るのじゃ」

また見ろと言う博士だった。

「これからのこのロボット達の活躍をな」

「はあ」

「さあ行くのじゃせ〇とくん達よ」

「伏字になってないよな」

「だよね」

今の博士の言葉に密かに突っ込みを入れたライゾウとタロだった。

「まあ見たらわかるけれどな」

「それでもちよつとはね」

隠して欲しい彼等なのだった。しかしその間にも博士の演説めいた言葉が続く。

「焼き尽くし破壊し尽くすのじゃ！」

「ナラッ！」

今の博士の言葉に禍々しいロボット達は一斉に両手を仏教式の合掌で応え声を出したのだった。

「今ナラって言いましたけれど」

「うむ、今の言葉か」

「あれ何ですか？」

小田切君はこのことを博士に尋ねるのだった。

「ひょっとして」

「うむ、まあ気にすることはない」

それで済ませようとする博士だった。

「ただの常に発する声じゃ。それだけじゃ」

「けれど何である声なんですか？」

小田切君はそのことをどうしても問わずにはいられなかった。

「ナラッ、って。かなり危ないですよ」

「危なくなくて何が面白いのじゃ」

博士にとって平穏なぞという言葉は悪徳と何ら変わらないものである。

「そんなもの何でもないわ」

「何でもないからこの声ですか」

「その通りじゃ。さて、そんなことよりもじゃ」

博士にとっては声なぞ所詮はその程度のものであった。まさに何事もなかったかのように言葉を続けていくのであった。

「これを一齐に動かしてこれから古都に進むぞ」

「古都にですか」

「このマスコット達の生まれ故郷にじゃ」

実に楽しい言葉と共に同じ様に楽しい笑みまで浮かべていた。

「帰らせてあげるのじゃよ」

「それはいいですけど」

小田切君はそのこと自体はまだいいとした。

「けれどこれ二千体ですよ」

「うむ」

見れば実に不気味なマスコットがずらりと並んでいる。本当に二千あるというのが怖かった。どれも全く同じ顔なのがその恐怖を増幅させていた。

「こんなのがぞろぞろと古都に進んだら」

「当然行く先を阻む者がいれば倒して進んでいく」

博士はこうしたとんでもないことも平然と言うのだった。

「ありとあらゆる方法でな」

「今からですか」

「そうじゃ。今からじゃ」

明日から、とかそういう発想もない博士であった。

「見るのじゃ。それではな」

「うわ、遂にはしまったよ」

「はじまらなくてもいいのに」

ライゾウとタロは一斉に歩きはじめたその人間の大きさのマスクットロボット達を見て如何にも嫌そうな顔で嫌そうな声を出したのであった。

「こんなのがぞろぞろと古都に進んで」

「邪魔をする人がいれば薙ぎ倒していったら」

「ああ、言い忘れておったが」

ここでまた言葉を付け加えてきた博士だった。

「このロボットは超A Iを搭載しておる」

「それ位今時普通じゃないんですか？」

小田切君は超A Iについてはどうも思わなかった。

「博士いつも物凄い超A I使ってるじゃないですか」

「左様、その超A Iじゃ」

まさにそれだというのだった。

「暴力団やチーマや暴走族といったものを見ればじゃ」

「すぐに無差別攻撃を仕掛けるんですね」

小田切君はそれを聞いただけでわかった。博士は自分の嫌いな存在は徹底して攻撃を仕掛ける主義だ。これを考えれば当然であった。

第六章

「容赦なく」

「そうじゃ。容赦なくじゃ」

「やっぱりこうなるんですね」

話が全てわかったあらためて呆れた言葉を出す小田切君だった。

「これから古都まで破壊と殺戮の嵐ですか」

「ゴミ掃除じゃ」

この場合のゴミとは博士が嫌いな存在のことである。

「ゴミ掃除をしながら進んでいくのじゃよ」

「破壊と殺戮ですよね」

小田切君が言うことは普通の考えにおいての言葉である。

「それって」

「破壊なくして創造はない」

これ自体はインド神話の考えである。インドでは創造、調和、破壊のサイクルが極めて重要な要素となっている。これはそのままインド哲学の思想にもなっている。輪廻にもなる極めて重要な思想なのだ。

「そしてわしは破壊者なのじゃよ」

「破壊するだけだよな」

「創造なんて発想の時点でないよね」

ライゾウもタロも既に長い付き合いなので博士のことがよくわかってきていた。

「そんなのな。全然な」

「破壊と殺戮が趣味だし」

「でははじまったぞ」

博士はそんな彼等の言葉は全く聞いてはいなかった。マスコット達は一斉に進軍をはじめていた。

「ナラッ、ナラッ」

「行くのじゃ〇んとくんよ」

「本当に伏字の意味ないですね」

小田切君は今の博士の言葉にも突っ込まざるを得なかった。

「今の言葉って」

「わしは構わん。見るのじゃ」

早速であった。

「たまたま通り掛ったチンピラがおるじゃろ」

「ええ、いますね」

実際にマスコット達の進軍の前に十人程度ガラの悪い若者達がいる。よく成人漫画等にッ出て来るモラルも何もなさそうな連中である。彼等はよせばいいのにマスコット達の進軍に対してガン飛ばしながら歩み寄ってきたのであった。

「まずはあの連中ですか」

「まあ最初はその連中じゃな」

博士はまるで小石を転がすように小田切君に答えた。

「見てみるのじゃよ」

「とんでもないことになるんですね」

小田切君はそれだけはわかった。そして今若者達がマスコットの前に出て来ると。早速マスコットの一体が若者達に対して両手を肩の高さで前に出してきたのだった。

「何だ、こいつ」

「あの気持ち悪いマスコットじゃねえか」

彼等から見てもやはりそうだった。

「こんなのがこんなにぞろぞろとよ」

「キモイんだよ」

「どけどけ」

「ナラッ」

だがそんな彼等に対してマスコットはその肩の高さに掲げた両腕の十本の指から何かを放ってきた。何とそれはマシンガンであった。「ぐわああああああああああっ！」

いきなり一人がそのマシンガンで蜂の巣にされてしまった。しかもそれだけではなかった。

「ナラッ」

「ナラッ」

一体は右腕の指を飛ばして手裏剣にして別の若者の喉を貫いた。

他の一体は左手の小指から指の背のところに刃を出しそれを一閃させてまた別の若者の首を飛ばしてしまった。その間マスコットの表情は全く変わっていない。

「な、何だこいつ等!」

「殺人マシンか!」

「ナラッ」

驚く彼等に対してさらに攻撃を浴びせる。口から火炎放射で焼いたり目からの冷凍ビームで氷づけにしたうえで粉々に砕いてしまう。他にはロケットパンチで爆殺もしている。酷いものになるとその機械の両腕で抱き締めそのまま抱き潰してしまった。マスコットのその身体をどす黒い鮮血と肉片、それに内臓や骨の切れ端や破片がこびり付いた。

「な、何て奴等だ」

「誰がこんなもん考え出しやがったんだ」

「わしじゃ」

博士は驚く彼等を見ながら言った。

「わしだけじゃ。この様な素晴らしいロボットを開発するのはな」

「まあそうですね」

小田切君は博士のその言葉を横で聞いて述べた。

「博士だけです。こんなことをするのは」

「そうじゃろう。さて、それでじゃ」

「今度は何が起こるんですか?」

「このマスコットの能力はこれで終わりではない」

「まだあるんですか」

「その通りじゃ。見るのじゃよ」

映像の映るその不気味なマスコットをさらに見よというのであった。

第七章

「これから起こることをな」

「あつ、もう最後の一人ですね」

虐殺はもうクライマックスを迎えようとしていた。今最後の一人がマスコットのうちの一体の両腕の中に完全に捉えられてしまったのである。

「ひ、ひいいいいいっ!!」

「ナラッ」

マスコットが掴んだ男の前で一言言った。そうして口を開くと。

「うわあ……」

その口を見て思わず声をあげた小田切君だった。何とその口には三重の無数の牙が生えていたのである。さながら鯊の口の中である。

「あの牙で、ですよね」

「左様、噛み砕く」

それだというのである。

「それも頭からのう」

「何か壮絶にえぐいですね」

「だからこそじゃよ」

博士はここでも平然としたものであった。

「だからこそああしたふうにしたのじゃよ」

「あの牙で頭からですね」

「ほれ、はじましたぞ」

映像では今まさに。その最後の一人に対してマスコットが禍々しく開いたその口を近付けているところであった。そうしてその口で噛み付き。

「ナラッ」

「あぎゃあああああああああっ!!」

男の断末魔の声が響いた。マスコットはそのまま彼の頭を噛み砕

いていく。

鮮血と脳漿が飛び散る。マスコットはそれに構わず男の頭を噛み砕く。肉と骨が碎ける嫌な音が映像からも響いてくる。マスコットの口の周りも身体も服もその鮮血と脳漿で行き悪く染まっていた。

「えげつないですねえ」

「殺すからにはえげつなくじゃ」

博士の主義である。

「ふむ、頭を完全に食らってしまったのう」

「ええ、確かに」

頭を食われて失くしてしまった骸はそのまま捨てられる。そうしてマスコット達の行進に踏み躪られ無惨な肉の塊となってしまうたのであった。

マスコット達の行進はなおも続く。最早男達のこととはなかったかのようだ。

小田切君はその行進を見ながら。また博士に問うのであった。

「古都まで進んでいくんですよね」

「左様、生まれ故郷にな」

「それで古都に着いたらどうするんですか？」

そのことも非常に気になるのであった。間違はなくともないことが起こるであろうとわかっていても聞かずにはいられなかったのだ。

「あのマスコット達は」

「そこからそれぞれ飛んでいったのう」

「えっ、飛べるんですか」

また一つわかった恐ろしい能力であった。

「あのマスコット。飛べるんですか」

「わしを誰だと思っておる」

またしてもぞんざいな返答であった。

「IQ二十万の天破天荒じゃぞ」

「そうですよね。それ位はですか」

「何でもない」

造作もないことだというのである。

「それでじゃ。空を飛んでじゃ」

「日本中を暴れ回るんですね」

「いや、世界中じゃよ」

日本だけに留まらないのがこの博士のとてもないところである。引き起こす騒動は世界規模なのである。国連から危険人物に指定されるのも当然である。

「世界中に飛んでいってな」

「あの不気味な姿で、ですか」

それだけでもかなりのものである。小田切君はまずこのことに絶句した。

「全世界にトラウマを引き起こさせるんですか」

「そしてわしが気に入らん連中を容赦なく殺戮していく」

しかも、なのであった。

「ああいったふうにな」

「酷いですね。じゃあ世界中が大変なことになりますね」

「何、大したことはない」

何故かそうした事態についてもこう言う博士であった。

「所詮ただの殺戮兵器じゃからな」

「いえ、それってただの、じゃないですから」

小田切君の突込みが正論であった。

「そんなのって」

「わしの発明からすればどうということはない」

博士の主張はこうであった。

「まあ古都に辿り着くまでも楽しみにしておれ」

「何か今度は目の前にいる暴走族に攻撃仕掛けていますけれど」

早速であった。先頭のマスコット達が両手の指の機関銃で一斉射撃を加えていた。

第八章

「ナラッ」

「うぎゃああああ!!」

それで忽ち何十人も蜂の巣になる。ただそれだけではなくその銃撃で頭が吹き飛び割れ脳漿が飛び散り腹が裂ける。腕がもげそれが落ちる。凄まじい殺戮の現場であった。

そこに今度は。口を開けるとそこからロケット弾が飛び。暴走族達の骸を撃ち焼き尽くすのだった。ついでにまだ生きている者達も焼いていく。

屍が焼け煙が充満する。映像からもその匂いが漂ってきそうである。既に音は聞こえている。

またしても陰惨な殺戮の場面であった。小田切君はこれを見てまた言うのであった。

「こうしたことが古都までですか」

「よいことじゃ」

博士は実に満足した顔をしていた。

「この調子でどんどん進むのじゃ」

「そのうち自衛隊来るよな」

「それか警察か」

ライゾウとタロは顔を顰めさせて言った。

「こんなことしていたらよ」

「間違いないよね」

「ふむ。では戦闘じゃな」

それを聞いて目を輝かせる博士であった。まるでピクニックを目前にした子供のように。

「自衛隊や警察と」

「戦闘もできるんですか」

「何、軍人や警官は殺すつもりはないぞ」

何故か彼等にはそれはしないという博士であった。

「隣の核兵器を開発したり拉致をする独裁国家の連中は別じゃがな」
「それも嫌いだからですね」

「あの国の軍服が嫌いじゃ」
だから嫌いなようである。

「じゃからあの連中には容赦せん」

「それで自衛隊や警察にはどうするんですか？」

「催涙ガスじゃ」

それを使うというのである。

「あの鼻と耳から出すことができるのじゃ」

「そんなものも出せるんですね」

「サリンの数十倍の毒素を持つガスも出すことができる」

これは洒落にならないまでに危険極まるものであった。

「しかもその体内にはじゃ」

「原爆でも搭載しているんですか？」

「その通りじゃ」

何処までも悪質極まりないマスコットである。博士がそう造ってしまったのである。

「さて、それが二千体じゃ」

「処分するのがとても大変そうですね」

「処分か。そうじゃな」

それを聞いて少し考えた顔にもなる博士だった。そうしてそのうえでまた述べるのであった。

「またあの独裁国家で。う。適当にじゃ」

「つまり核爆弾を二千発も撃ち込むんですね」

結果としてはそれも同然であった。何しろ一体一体に核爆弾を搭載しているのだから。それ自体が核ミサイルと全く同じであるのだ。

「無茶苦茶じゃないですか」

「格実驗をあそこまでして核兵器を持ちたがっておるのじゃ。本望であろう」

博士にとってみればそうとしか考えられないことであつた。

「じゃから二千発のう。撃ち込んでやるのじゃ」

「それである国が消え去ってもいいんですね」

「世の中わしの嫌いな存在はそうそう減らんものじゃ」

要するに暴走族や不良やチーマーやヤクザやチンピラといった存在である。博士は小悪党の類は見ていただけで殺戮したり生体実験に使いたくなるのである。それが博士なのだ。

「じゃからよいのじゃよ」

「まあ僕もあの国は嫌いですけどね」

このことについても小田切君と博士は同じであつた。もつともあつた国家を好きといえば相当な変態か異常な精神の持ち主か奇特な思想をする人間だけであろう。若しくはその国から何かしらの見返りを受けているかである。どれにしろ碌なものではない。

「それでも。まあ何ていいますか」

「よいのじゃよ。わしが気が済むからのう」

実に利己的な言葉であつた。

「それではじゃ」

「はあ」

「進撃をまた見守ろうぞ」

「進撃をですか」

「目指せ古都じゃ」

その最終目標は変わらないのであつた。

「消火だ！消火を頼む！」

事務所の中で暴力団員達がステーキか蒸し焼きになっていた。何とか窓や出入り口から逃げ出した者はその場で機銃掃射を受け薙ぎ倒されていく。

今回も恐ろしい殺戮であった。そして暴力団員達が皆殺しにされるとマスコット達は事務所を口から放ったロケット弾で吹き飛ばし更地にしてしまった。

そのうえで再び進撃をはじめる。何時の間にか古都まで間も無くの距離まで迫っていた。

「あれ、もうですか」

「二十四時間行動できるからじゃ」

博士はその進撃の理由の速さについても述べた・

「だからじゃよ」

「それで速いんですか」

「うむ。エネルギーは常温核融合を使っておる」

博士はもうこの超エネルギーを実用化させているのである。

「じゃから無限に動けるしのう」

「それで弾薬とかは」

「大気中の成分を吸収して体内で増加させて製造しておる」

「そうやって造っているのだという。」

「そうやってのう」

「本当に物凄い発明ですね」

補給が不要というだけでも物凄いものであると言える。

「そこまですか」

「それが二千じゃよ」

考えてみれば実にとんでもないことである。

「さて、止める勢力はあるかのう」

「ああ、自衛隊も警察も出て来ませんね」

このことにも気付いた小田切君であった。

「古都の辺りにも確か自衛隊の施設があったと思うんですけど」

「航空自衛隊じゃな」

博士はすぐに小田切君に述べてみせた。

「あそこの幹部候補生学校じゃな」

「ああ、あれでしたか」

言われて思い出したような顔になる小田切君であった。そこには確かに航空自衛隊の幹部候補生学校が存在しているのである。

「あそこがあるんですか」

「他の国で言う士官学校じゃな」

士官学校と呼ばれないのが日本の複雑なところである。

「それじゃな」

「そうですね。航空自衛隊ですか」

「それも出て来んのう」

航空機一機空に出て来ることはなかった。

「陸も海も出て来んしのう」

「どうしてですかね」

「恐れを為したわけではあるまい」

博士はその可能性は自分の頭の中ですぐに否定してしまった。有り得ないというわけである。

「それはのう」

「ないですか」

「それじゃったら過去何度もわしの前に出て来てはおらん
こう言う博士であった。

「何度ものう」

「じゃあ今回出て来ないのは」

「左様、そこじゃ」

まさにそのことを指摘する博士であった。

第十章

「これは何かあると考えてよいぞ」

「何かですか」

「問題はその何かがどういったものかなのじゃが」

「何だと思います？」

「魔女ではないかのう」

博士は少し考えてからこう予想を述べてみせた。

「魔女が来るかも知れんのう」

「あれ、あの娘達は今臨海学校か林間学校だったんじゃない？」

「いや、魔女は他におる」

小田切君は華奈子達のことを言ったのだが博士は彼女達ではない
というのであった。

「このわしの二千もの殺戮マシンの相手をできる魔女じゃよ」

「といいますと」

小田切君はそれを聞いて彼も少し考えてみるのであった。そうし
て考えた結果出て来たのは。

「あの人達ですか」

「そうじゃ。あの二人しかおらぬ」

博士は小田切君に対して頷いて答えた。

「やはりな」

「あの人達が出て来るとなると」

「さて、面白いことになりそうじゃ」

またしても何か子供が遠足に行くようにうきうきとした博士で
あった。

「果たして何処で戦うことになるのかのう」

「まああれですね」

うきうきとしている博士とは違って小田切君は至って冷静であっ
た。その対比はまさに水と油、氷と炎であった。そこまでの違いが

あった。

「人様の迷惑にならないような場所で戦闘になればいいですね」

「何じゃ、詰まらん」

それを聞いた博士の返答である。

「そんな戦闘が何だというのじゃ」

「博士は世界の人々に迷惑をかけ過ぎなんですよ」

まさに世界規模の災厄とも言っている人物なのがこの博士である。

「そもそもですね」

「世の中破壊がなければ何もできません」

博士が言うのと実に自分勝手な言葉をここでも出す。

「だからじゃ。今回もじゃ」

「派手な場所で戦いたいんですか」

「さて、何処になるかのう」

もう勝手にそうした人様の迷惑になりそうな戦いの場を頭の中にインプットされているその地図から探しだす博士であった。こうした行動は実に素早い。

「いい場所は」

「そうした場所での戦いはあの人達の方から避けると思いますけれどね」

「それがよくないのじゃ」

「それだけ派手な場所で戦いたいんですね」

「戦わせたいのじゃ」

言葉は多少訂正されたが大筋において同じ意味であった。

「わしのあのマシン達をな」

「とにかくもう少ししたら古都ですけれど」

小田切君は距離について述べた。

「それでどうするんですか？」

「予定通りじゃ。このまま古都に入れる」

このことは何の変更もなかった。

「このままのう」

「そうですか。じゃああの人達とは古都で決戦ですかね」

「古都で決戦か。よいのう」

それを聞いてまたしても楽しそうに笑う博士であった。

「一体全体どうなるかじゃ」

「全く。そういうことばかり考えるんですから」

呆れはしたがそれでも予想通りだとも思う小田切君であった。そんなことを考えながらそのうで博士とさらに話を続けるのであった。

「それですね」

「うむ」

「あの朱雀門から入るんですよ」

「当然じゃ」

この返事にも何の迷いもなかった。

「あそこが復元されるからには入らねばな。話にならんじやろ」

「あの門が破壊されなかったらいいんですけどね」

「何度も言うが形あるものは必ず壊れる」

「必ずっていいますけれどね」

「戦いの最中でどうなってもそれはそれで絵になる」

博士にとってはそういったことはむしろ華であるのだった。

「では。よいな」

「ええ。じゃあもう野となれ山となれで」

小田切君の言葉は投げやりなものにもなっていた。しかしそれでも言うのであった。

「見ていきますか」

「ふむ。見えてきたぞ」

その朱雀門が映像でもいよいよ見えてきたのであった。パソコンの前には博士と小田切君だけでなくライゾウとタロも一緒にいた。

「ああ、あれが朱雀門か」

「中々いいじゃない」

ライゾウとタロは門を見てすぐに褒めるのだった。

「あの門だったらな。復元しても文句ないよな」

「歴史を感じるしね」

「よいことじゃ。歴史を破壊する」

博士の興味はそこにしかなかった。

「いざとなればのう」

「っていうか壊す気満々じゃないか」

「この博士だけはしょうがないね」

ライゾウもタロもそんな博士には呆れるばかりであった。だが彼等がそんな話をしている間にもマスコット達はその朱雀門にさらに近付いていた。

第十一章

「どっちがタイプなんだよ」

「その辺りはつきりしないんだけど」

「そう言われると」

今の彼等の問いには困った顔になる小田切君であった。そうしてその困った顔で腕さえ組みながらそのうえで答えるのであった。

「二人共そっくりだしねえ」

「確かになあ。従姉妹同士だけれど」

「まるで双子みたいだね」

彼等もこのことはよくわかっていた。

「法衣と帽子の色でわかるけれどな」

「それでもそれ以外は」

「だろ？だからどっちかって言われると」

困ってしまうのであった。

「まあ今田香織先生とはお話する機会が多いけれど」

「じゃあ金色さんだな」

「そうなるね」

そういうことにしてしまう彼等であった。

「まあいいんじゃないの？いい人だし」

「そうだよ。美人で性格はいいし声も奇麗でスタイルもいい」

まさに完璧である。

「しかもお金持ちの娘さん」

「おまけに日本でもトップクラスの魔女だし」

これについては二人共である。二人は従姉妹同士で日本はおろか世界でもトップクラスの魔女なのである。その黄金色と白銀色の法衣と帽子は伊達ではないのだ。

「いいところばかりじゃないか」

「そうだよね。完璧だよ」

「そうなんだよねえ」

小田切君ののろけは続く。

「本当にね。ちょっとやそつとじゃね。声をかけられないような」

「それでその今田先生があのもスコット達と対峙しているけれど」

「大丈夫かな」

ライゾウとタロはそこに話を戻してきた。

「二千もいるからなあ」

「辛いんじゃないかな、やっぱり」

「そうだよね」

小田切君もこのことには深刻な顔になった。のろけるにも程があるといった顔から深刻かつ真面目な顔になってそのうえでまたモニターを観るのであった。

そうしてそのうえで。彼は言うのであった。

「一人で千体だけれど。大丈夫かな」

「普通の魔女では絶対に無理じゃ」

ここで言うのは博士であった。

「一体でもな。無理じゃ」

「一体でもですか」

「何度も言うがそもそもあのマスコットの中には原爆が内臓されておる」

核拡散防止条約なぞ意に介することはない博士である。

「それでドカンとなればそれで終わりじゃ」

「その魔女一人で済みませんよね」

小田切君にもそうなった場合はどうなってしまいか容易に想像がつくことであった。花しながら広島で見た原爆資料館のことを思い出す。

「ああなるんですよね、半径四キロ位が」

「破壊力は広島型原爆と同じ程度じゃ」

やはりこの原爆であった。

「リトルボーイじゃな」

「そりゃそんなの普通の魔女は相手できませんよ」

小田切君はまさにその通りのことを述べた。

「それこそ相当な魔女でないと」

「それに全身武器じゃ」

全てのマスコットがそうなのである。

「そう簡単にはのう。やられんぞ」

「さて、どうなるかな」

内心先生達を応援しだしている小田切君であった、

「無事であって欲しいけれど」

「さあ、はじまりじゃ」

ここで博士が言った。

「祭がのう」

「とんでもないことになりそうなのに祭か」

「博士らしいね」

今の博士の言葉を聞いたライゾウとタロの言葉であった。

「全く。どうなるやら」

「核爆発で古都が消えなかったらいいけれど」

「その辺りどうするのかな」

小田切君もまずそのことが気になって仕方がなかった。モニターに映っている先生達を見てそのうえで不安な顔になっていた。

「先生達も」

「そこが見ものっていえば見ものなんだけれどな」

「どうするのかな」

ライゾウもタロも固唾を飲んで見守っていた。そしてその先生達は。その行進をしながら迫り来るその二千のマスコットと対峙しつつ今構えを取った。

今田先生は右手に、今日子先生は左手にそれぞれステッキを持つ。そのステッキを前に肩の高さで突き出しそのうえで言うのであった。

「じゃあまずは今日子ちゃん」

「あの魔法ね、香織ちゃん」

「ええ。それを使うわ」

こう二人で言い合う。そして。

「ニュークリアストリーム！」

「行くわよ！」

二人はそれぞれのステッキから嵐に乗せて七色の光を発した。虹色の光はまさに嵐となって吹き荒れる。だがそれは只の光ではなかった。

光の嵐が消えた後で博士は。映像を見ながら言うのだった。

「むっ！？これは」

「どうしたんですか博士」

「マスコット達の中に搭載されている原爆の核が分解されておる」
こう言うのである。

第十二章

「反応が完全に消えてしまっておるわ」

「えっ、完全にですか」

「そうじゃ」

こう小田切君にも答える。

「一体残らずのう。それも完全にじゃ」

「じゃあ今の虹色の光で」

「間違いない。そういう魔法だったのじゃ」

そうすぐに分析して断定してしまったのだ。博士の脳内で。

「今の魔法はのう」

「まさか核融合を中和してしまうなんて」

「魔法には色々なものがある」

ここでこんなことも言う博士であった。

「そういうことじゃよ。じゃから」

「これで自爆はできなくなったんですね」

「その通りじゃ。しかしじゃ」

だがそれでもなのだった。博士は原爆が全て無効化されてもそれでも目は生きていた。爛々としていてまるで炎のようであった。

「まだまだあるぞ」

「マスコットそれぞれの武器ですね」

「あのマスコットはまさに殺戮マシーンじゃ」

博士はここで何故か胸を張っていた。

「人を殺す為だけの存在なのじゃ」

「確かにそんな顔してるよな」

「外見もね」

ライゾウとタロは今の博士の言葉をマスコット達の外見から判断して述べていた。だがそれもその不気味な外見を見ては仕方のないことであった。

そしてそのマスコット達は。今度はその両手をゆっくりと前に肩の高さまであげて。そのうえで十本の指から何かを出そうとしていた。

「ナラッ」

「ナラッ」

「いよいよ来るわね」

「そうね」

先生達はそのマスコット達が迫って来ても落ち着いていた。

「それじゃあ今度は」

「あれをしましょう、ええ、あれね」

今度は身構えない。両手をおろして何やら力を溜めている雰囲気である。そうしてマスコット達がそれぞれの十本の指からマシンガンを放ってきた。すると。

「来たわね！」

「アイスウォール！」

こう叫んでまたステッキを前に突き出す先生達だった。すると。

先生達の前に氷の壁ができた。そしてその壁でマスコットのマシンガンの弾丸を全て弾き返してしまったのであった。そう、全てだ。

「おいおい、そう来たか」

「氷の壁を出すなんて」

ライゾウとタロがそれを見て素直に驚いていた。

「防御も完璧っていうのかよ」

「あれじゃあ炎もミサイルも通用しないね」

「ただの氷じゃないな、あれは」

小田切君はその氷を見て呟いた。

「魔法の氷だね」

「そうじゃな。ただの水でマシンガンは防げぬ」

博士もそのことを即座に見抜いたのだった。

「魔法の水じゃ。何でも防げるな」

「流石ですね」

小田切君は今度は賞賛の言葉を口に出した。

「まさかああしてマシンガンの弾丸を防ぐなんて」

「あれでは確かに腕や口からのミサイルも通じぬ」

博士はこのことも既に見抜いているのであった。

「当然指の手裏剣やそういったもののものう」

「アイスビームもですね」

小田切君はアイスビームについても言及した。

「氷ですから」

「氷に対して氷で攻めても無駄じゃ」

やはりそういうことであつた。

「何にもならんわ」

「ですよね、やっぱり」

「あの氷の壁には殆ど防がれる」

マスコットの攻撃がということである。

「既に原爆は無効化されておるしのう」

「どうするっていうんですか？それで」

「何、まだ手はある」

しかし博士の楽しむ顔はまだ崩れてはいないのだった。

「まだのう」

「つていいますと？」

「見るのじゃ」

こう小田切君に述べるのだった。

「マスコットの動きをのう」

「はあ。マスコットの」

「答えはそこにある」

続いてこうも言うのだった。

「そこにじゃ」

「わかりました。それじゃあ」

博士の言葉に頷いてそのうえで様子を見る。するとここからマスコット達はマシンガンの一斉射撃を止め次第に先生達との距離を詰

めてきたのであった。

第十三章

それを見た先生達は。また互いに言い合うのであった。

「今度は接近戦で来るみたいね」

「そうね」

即座にそれを察知したのであった。

「それじゃあ私達も」

「そうね」

悠然と、かつ華麗な動作で舞うようにしてステッキを動かしてみせてきた。

「今度は攻撃に転じて」

「一気に決めるわよ」

二人は一気に跳んだ。そうしてまるでその背に翼があるように宙を舞いそこから。夢幻の光の球を無数に放ったのであった。

「レインボーボールシャワー!!」

「レインボークリスタルスコール!!」

技の名前はそれぞれ違うが同じ様な性質のものだった。宙を舞う先生達のステッキからあれよこれよといった勢いで無数の虹色の球が放たれそれがマスコット達に向かって降りたのである。

虹色の球は大地を跳ね回りながらマスコット達に当たっていく。すると当たったマスコット達はその傍から姿を変えるのであった。その姿は。

「えっ!?!」

「お菓子!?!」

ライゾウとタロがその変わった姿を見て思わず声をあげた。

「ケーキに変わったぞ」

「それもかなり大きなケーキに」

マスコットの大きさのままのケーキであった。確かにかなり巨大なケーキである。

「苺にチョコレートにマロンに」

「チェリーにキャラットって。種類も多彩だね」

「これは想像できなかったなあ」

小田切君はそのケーキ達を見て言った。その間にもマスコット達は次々と様々な種類のケーキに変えられていくのであった。

「ケーキに変えるなんて」

「魔法は色々じゃということじゃな」

だが博士はそれを見ても冷静な態度はそのままなのであった。予想していなかったにしろ全く動じていないことはそこからわかるものだった。

「ああいうものもあるのじゃ」

「そういうことですか」

「あれであの大きさのマスコット達は終わりじゃ」

博士はもう戦いの流れを見極めていた。

「勝てはせんよ」

「そうですか」

「守りは万全じゃし」

見れば先生達は舞いながらその全身にあの氷の壁を張っていた。それをバリアーにしてそのうえで攻撃を仕掛けているのである。

そしてその虹色のボールでの攻撃だ。まさに攻防完璧であった。爆撃そのものの攻撃によりマスコット達は次々にケーキに変わっていく。ものの五分もしないうちに二千体全てがケーキになってしまった。

「うわ・・・・・・・・」

「五分で」

ライゾウとタロはまた驚いてしまっていた。

「あれだけのマスコット達がかよ」

「全部ケーキになってしまったよ」

「美味そうじゃな」

そのケーキ達を見た博士の言葉である。

「多少大きいのが問題じゃがな」

「まあそうですね」

小田切君はとりあえず博士のその言葉にも頷いた。

「美味しそうなことは美味しそうですね」

「うむ。全くじゃ」

「これで終わりね」

「そうね」

そして魔法でマスコット達を全てケーキに変えてしまった先生達は氷の壁も解いてそのうえで着地して言うのだった。ケーキの中に囲まれている。

「あとはこのケーキ達をね」

「子供達に送ってね」

「そうしましょう」

「ええ」

こう言葉を交えさせるのであった。

「さて、次の魔法は」

「これね」

そうして再び魔法を放とうとする。今度の魔法は。

「ハレーションワープ！」

二人同時に叫んでそのうえでその二千ものケーキを消したのだった。何と世界各地の子供達に対してそのケーキ達を送ったのである。

第十四章

「すげえ」

「子供達にちゃんと送るなんて」

ここでまた驚くライゾウとタロであった。

「やっぱりな。あの先生達ってな」

「人間できてるよね」

「いいなあ、あの優しさ」

小田切君はとりわけ今田先生を見て言うのだった。

「ああした心配りができるところがまたいいんだよなあ」

「ふむ。これでマスコット達は消えたのう」

だが博士はそんなことは全く意に介してはいなかった。まるで石ころが消えてしまったかのように沈着な様子で語るだけであった。

「あの大きさのはのう」

「世界中の子供達が笑顔でケーキを食べていますよ」

「そうじゃな」

モニターに映る巨大なケーキを満面の笑顔で食べる子供達を見ても無機質なものであった。

「美味そうじゃな」

「ってそれだけですか」

「それだけじゃ」

またしても無機質な言葉であった。

「さて、それではじゃ」

「子供達が笑顔でケーキを食べているのに」

「わしにとっては暴力団員が八つ裂きにされる方が余程いい光景じゃ」

しかも自分の開発した兵器や実験によって、である。博士にとってはそちらの方が遥かに美しく素晴らしい光景なのである。流石である。

そしてその博士は。何でもないというふうにまた言うのであった。

「まあ次はじゃ」

「今度はどうするんですか？」

「切り札を出す」

素っ気無く述べるのだった。

「切り札をのう」

「切り札って何ですか？」

「だからあれじゃ」

ここであれだと言うのである。

「あれを出すのじゃよ」

「あれってひょっとして」

話しているうちに思い出してきた小田切君であった。記憶は頭の中で無意識の底からさながら泡の様に浮かんで出て来るものなのである。

「巨大マスコットですか」

「今こそ出番じゃな」

博士はまた言った。

「いよいよのう」

「本当に出すんですね、それを」

「出さずして何とする」

「出さずして、ですか」

「開発、製造したからには出すものじゃ」

博士の持論である。それが迷惑かどうなのかはまた別の次元の問題である。

「だから出すのじゃよ」

「はあ。そうですか」

「よし、発進じゃ」

思い立ったらすぐに出すのもまた博士であった。

「そして古都に向けて進撃じゃ。いでよ！」

「ナラーーーーーッ！」

不気味な叫び声が轟いてきた。

それと共に古都の前にこれまでとは比較にならないまでに巨大なマスコットが出て来た。その大きさは最早高層ビルに匹敵するものであった。

「全長何メートルですか？あれって」

「五十メートルじゃ」

博士はすぐに小田切君の問いに答えた。

「光の戦士とも戦えるようにと思ってあの大きさにした」

「そうですか。五十メートルですか」

「手頃な大きさじゃろう？」

そのとてつもない大きさのマスコットを見てもこんなことを言うのだった。

「あれ位が派手に暴れるには丁度いいのじゃよ」

「派手にですか」

「なお装備は同じじゃ」

装備についても言及したのだった。

「ただしサイズは巨大になっておるがのう」

「巨大にですか」

「大砲サイズのマシンガンじゃ」

これまたとんでもない兵器である。

「しかもミサイルも巨大で。う。街を一撃で炎の海にできるぞ」

「あの、そんなとんでもない兵器なんですか」

「そして角から雷を出したりするのも同じじゃ」

実に余計な部分まで同じであるのだった。とにかく極めて迷惑な存在なのが巨大化してさらに迷惑なものになってしまっているのがある。

第十五章

「どうじゃ。これならば国を一個破壊するのも容易いぞ」

「何か外見だけ違ってカイザージョーとか鉄人と変わらないんですね」

「わしの作るものはどれも完璧じゃ」

マントを羽織って自信満々で言い切るその姿はまさに悪の科学者そのものであった。

「だからじゃ。あのマスコットも完璧なのじゃよ」

「完璧に作るなよ、そんなもの」

「だよねえ」

ライゾウの言葉に相槌を打って頷くタロだった。

「おかげで毎回毎回大騒ぎだからね」

「折角あの二千体が消えたってのによ」

「それでは。行くのじゃ」

しかし博士は彼等のそんな話をよそに何処からかマイクを出して巨大マスコットに命じていた。

「そして古都に乗り込みあの先生達を退けるのじゃ」

「さて、先生達はどうするのかな」

小田切君は先生達がここで何もしないとは思っていないのだった。やはり何かをしてくると思ってモニターを見続けているのだった。

「この巨大マスコットに対しては」

小田切君が見ているそのモニターの中にいる先生達はその巨大な存在を見ても逃げ出してなぞいなかった。それを見上げて毅然として立っているのだった。

そして今田先生が今日子先生に。こう尋ねるのだった。

「じゃあ今日子ちゃん」

「香織ちゃん、あれをやるのね」

「ええ。やっぱりあれよ」

こう今日子先生に返すのだった。

「あれが一番いいわ」

「わかったわ。それじゃあ」

「召喚！」

「召喚！」

先生達は二人同時にステッキを上に掲げた。すると。

黄金の光と白銀の光が発されそれは天にまで届いた。するとその天からこれまたとてつもなく巨大な存在が降臨したのであった。

「うわ、そう来たか」

「まさか召還するなんて」

ライゾウとタロはモニターを見て今回の騒動で最も驚いた。

「しかも召還したのが」

「それなんだ」

「うわ、ここまでするんですか」

小田切君もモニターを見て驚くことしきりであった。

「この先生達は」

「ふうむ」

そして博士はそれを見て考える顔になっていた。

「そう来たとはのう」

「二人の天使ですね」

降臨してきたのは天使達だった。どちらも六枚の翼を持っていることから最高位にある天使達であるとわかる。

どちらもかなり丸い顔をしていて五頭身である。一方は頭に魔法使いの三角帽を被っており黒い服を着ている。もう一方は黒髪に赤いリボンをした赤い服を着ている。どちらも少女の样だ。天使達は二人一緒になって言うのだった。

「ゆっくりしていいってね！」

「ゆっくりですか」

「あのマスコットに対抗するにはこれというわけじゃな」

博士は妙に納得したように述べるのであった。

「そういうことじゃな」

「またえらく壮絶な天使達ですね」

「相手にとって不足はない」

博士はその二人の天使達を見ても動じるところは全くなかった。

「それではじゃ。行くのじゃ、あたためてのう」

「ナラッ」

両手をキョンシーのように前に出して応える巨大マスコットだった。その動きは何処か不気味でやはり妖しい瘴気まで漂わせている。そのうえで天使達に対して両手の十本の指からキョンシーの構えで一斉射撃を行う。しかし天使達はそれに対して六枚の翼を羽ばたかせ風を起こしたのだった。

「ゆっくり！」

「ゆっくり！」

こう叫びながら激しい風を起こしそれにより弾丸を風の中に巻き込んでしまった。こうしてマスコットの放った弾丸は全て無効化されてしまったのであった。

「ふむ。弾丸は通じんか」

「ミサイルも効きそうにないですね」

小田切君はその風の威力を見て博士に述べた。

「あれだけの威力ですと」

「そうじゃな。それでは他のやつでいこう」

「雷ですか？それとも冷凍ビームですか？」

「とりあえずは雷じゃ」

博士が今選んだのはそれであった。

第十六章

「それで攻撃を仕掛けるとする」

「雷なら風の影響をそれ程受けないからですね」

「そういうことじゃ。それではじゃ」

「ナラッ」

また博士の指示に応える巨大マスコットであった。その巨大なつぶらな瞳も可愛いどころか実に気色悪いからかえって不思議ではある。

「雷を放て。よいな」

「ナラッ」

ここでも博士の言葉に従い二本の角に雷を受けてそのうえで一つにして天使達に向かって放つ。天使達はその雷に対してそれぞれ手を前に出してきた。

金髪の天使は右手を、黒髪の天使は左手を。それぞれ前に出して人差し指から白い光の帯を放ってそれと共に叫ぶのであった。

「ダブルゆっくり」

「ビーーーーーーーーム！」

その二本のビームと雷が激突する。するとそれにより雷もビームも消えてしまった。天使達はまたしてもマスコットの攻撃を打ち消してしまったのであった。

「また相殺しましたね」

「流石にやるものじゃ」

博士はそれを見てまた言った。

「伊達に最高位の天使達だけではないのう」

「まあ翼が六枚ありますからね」

小田切君もその翼ははっきりと見ている。

「それだけ力が強いってことですか」

「しかしマスコットの力はまだまだこんなものではない」

だが博士も引くことはなかった。

「まだまだのう」

「という今度は何をやらかすんですか？」

「見るのじゃ」

また見るように小田切君に勧める博士であった。

「これからをのう」

「けれど武器は全部使いましたよね」

しかし小田切君はこう博士に返した。

「通用しそうなものは」

「何、一つ一つはそうかも知れん」

博士の言葉はいつもと変わらない余裕の中にあった。

「一つ一つはのう」

「一つ一つっていいますと」

それを言われてこれまたきよとなる小田切君だった。

「何かまたとんでもないことをするんですね」

「三本の矢じゃ」

毛利家の話まで出す博士だった。

「いや、三本が駄目なら五本じゃ」

「ロスチャイルドですね」

小田切君はその五本の矢が何なのかすぐにわかった。ユダヤ系のあまりにも有名な世界的富豪である。欧州に五つの家を持ちその繁栄を支えてきた。今も欧州はおろか全世界でかなりの力を誇っている。

「五本ですと」

「それでも駄目なら十本じゃ」

博士の言葉は一見際限がないように聞こえるものだった。

「とにかくこの考えじゃよ」

「つまり総攻撃ってことですか」

ここで察した小田切君だった。

「そういうことですよね」

「左様。それではじゃ」

博士は小田切君の言葉に頷いた上でまたマイクを手を取った。そうしてそのうえでまた巨大マスコットに対して指示を出すのであった。

「総攻撃じゃ」

「ナラッ」

返事はすぐに返って来た。

「そうしてあの天使達を退けるのじゃ。よいな」

「ナラッ」

また応えるマスコットだった。

「よし、それではじゃ」

「ナラッ」

「発生パターンは一つなんですネ」

小田切君はマスコットの今の言葉を聞いてこのことも指摘した。

「ずっと聞いていて思ったんですけれど」

「それ以外いらんからのう」

博士の返答は実に素っ気ないものであった。

「じゃからこれだけ言えるようにしたのじゃよ」

「そうだったんですか。それですか」

「それにじゃ」

そしてまた言う博士だった。

「今度の総攻撃は凄いぞ」

「そんなにですか？」

「一回の総攻撃で地球が崩壊する」

そこまで豪語する程であるというのだ。

第十七章

「一回でじゃ」

「僅か一回、ですか」

「さて。それだけの攻撃じゃが」

博士はモニターを見ながらまた述べていく。

「あの天使達はどう防ぐのかのう」

「さあ。防ぐにしろですけれど」

小田切君も少し首を捻っていた。捻りながらの言葉である。

「ゆっくりでしようね」

「ゆっくりだというのじゃな」

「何かあの天使の口癖がそうですし」

モニターに映るその五頭身の天使達も見ていた。その姿は翼がなければとても天使には見えないものだった。しかも六枚の翼であるのがかえってややこしい。

「そうだと思いますよ」

「じゃが今回はゆっくりではないぞ」

博士は不敵に笑って豪語さえしている。

「激しい総攻撃じゃからのう」

「その地球が一回で崩壊するっていう」

「そうじゃ。さて、どう防ぐ？」

それを観るのが楽しみであるかのような言葉であった。

「この攻撃は」

博士の言葉に従いマスコットはまずはマシンガンを一斉射撃しそのすぐ後に冷凍ビームと口と腕からのミサイル、それに雷を放ってきた。しかもまた一斉射撃をするのだった。

「ナラッ」

「やるわね、流石に」

「伊達に巨大なだけじゃないわね」

先生達も逃げてはいない。戦いを見守っているのだ。

「けれどね。天使達だってそう簡単にはやられないんだから」

「六枚の翼を持つ最高位の天使達よ」

六枚の翼にはそれだけのものがあるのである。

「その攻撃にだってね」

「負けないんだから」

言いながら天使達を見る。そして彼女達にも言うのだった。

「御願い、天使達」

「ここで頑張って！」

こう言うのであった。

「貴女達が地球を救ってくれる剣だから」

「だからここは」

「ゆっくり！」

先生達に対する天使達の返事はこれだった。

「ゆっくり！」

「そう、やってくれるのね」

「有り難う」

先生達は天使達の言葉がわかるらしい。このゆっくりという言葉
を聞いただけで微笑んで頷く。それが何よりの証拠であった。

「それなら御願いするわ」

「ここは最大の力を出して！」

「ゆっくり！」

「ゆっくり！」

こう先生達に伝えて言う天使達だった。

そのうえで二人で向かう。今まさにマスコットの総攻撃が彼女達
に襲い掛かる。

それに対して彼女達は背中の翼を羽ばたかせた。すると。

「ゆっくり！」

「フーーーーーッシュー！」

二人同時に叫びその翼から黄金の眩い光を放つ。光は瞬く間に二

人を包み込んでしまった。そしてその光がマスコットの攻撃を全て防いでしまったのだった。

「えっ、あれを!？」

「防いだのう」

小田切君と博士はそれを見てそれぞれ言った。

「いとも簡単になって」

「やりおるわ」

驚く小田切君に対して博士は冷静であった。

「これで勝負あり? ひょっとして」

「ならば最後の手段じゃな」

二人は見事なまでに対称的であった。

「最後の手段って」

「後は接近戦じゃよ」

「接近戦ですか」

「縁距離戦で決着がつかなければそれしかあるまい」

一応正論ではあった。

「ならばのう」

「まあそうですね」

小田切君もその理屈は理解できた。

第十八章

「同じ戦い方を繰り返しても何にもなりませんし」

「そういうことじゃ。ではよいな」

「僕にそういうの決める権利ありましたっけ」

「参考にしたいから尋ねたのじゃよ」

「だからだというのである。」

「とにかく。それでよいな」

「いいんじゃないですか？」

今一つ自分の考えを出していない返答であったが実際に今の小田切君はこの戦いについて特にどうこう思っていないのでこう答えたのである。

「それじゃあそれで」

「うむ。では決まりじゃな」

小田切君のその意見を参考にはする博士であった。

「接近戦じゃ。行くのじゃ」

「ナラッ」

マスコットはまた博士の言葉に応えそのうえで天使達に近付いていく。先生達はそのマスコットの動きを見て天使達に対して告げるのだった。

「来たわ」

「それなら今度はね」

既に相手が何をしてくるのか察知している言葉であった。

「接近戦で御願い」

「辛いだろうけれど」

「ゆっくり」

しかしここでも天使達の返答は変わらなかった。こう今までと同じように答えるのだった。

そうして彼女達もゆっくりとマスコットに近付きそのうえで、で

あった。マスコットと激しい肉弾戦に突入するのだった。

巨大な者同士が正面からぶつかり合う姿は壮絶だった。内容はただの殴り合いでばかばかとやっているだけであるがその大きさが違い過ぎた。激しさが違っていた。

まるで地球を殴り潰すような激しい殴り合いになっていた。それが結構な間続いていた。しかしやはり天使達は二人、それに対してマスコットは一体である。二対一という差が出た。

次第にマスコットのダメージが蓄積されていく。あちこちからスパークする電流や煙が出て来た。それと共に動きも鈍くなっていた。「よし、今ね」

「遂に決着が着く時が来たわ」

先生達はここで勝負をつける時が来たと確信した。

「それなら後は」

「あれよ」

そしてここでも天使達に告げるのだった。

「あれで決めて」

「それで終わりだから」

「あれって？」

今の先生達の言葉にまた眉を動かした小田切君だった。

「あれって何なのかな」

「まあ決め技だろうな」

「流れからいってね」

ライゾウとタロは自分達の予想を小田切君に告げてきた。

「それが何かはわからないけれど」

「それだと思っければ」

「まあ流れからいったらそうかな」

小田切君も少し考えてからこう述べた。

「やっぱり」

「さて、何だろうな」

「何をしてくるかな」

ライゾウとタロは何処かうきうきとしているようだった。

「果たしてな」

「それが問題だけれど」

「そういえば何か」

ここであることに気付いた小田切君だった。

「天使達の額だけれど」

「ああ」

「そこがどうかしたの？」

「点滅してない？」

こう彼等に対して問うのだった。

「何か赤と青にさ」

「ああ、そういえばそうだな」

「あれって何か」

ライゾウとタロは小田切君の指摘を受けて言った。

「カラータイマーそっくりだよな」

「光の戦士のね」

「そうだよね。というかそのままだよな」

小田切君は実にあっさりと言い切るのだった。

第十九章

「あれってね」

「じゃああれか」

「もう時間がないんだ」

彼等もすぐにそのことがわかった。

「天使達にとっても」

「じゃあここはやっぱり」

「だろうね」

小田切君はここでようやく確証を持てるようになった。

「仕掛けて来るよ」

「そうか。それじゃあ」

「見せてもらおうか」

殆ど天使達を応援しているような感じだった。天使達はその中で一旦間合いを開けた。そうしてそのうえでそれぞれの両腕を手刀の形でバツの形にクロスさせた。

それから。こう叫んだのだった。

「ゆっくり！」

「スペシウム！」

「まんまだよな」

「うん、そのまま」

今の技にすぐに突っ込みを入れるライゾウとタロだった。

「あの光の国の戦士だな」

「そのままだよね」

「まあいいんじゃないの？」

しかし小田切君はそれをよしとするのだった。

「だってさ。相手も相手だし」

「それもそうか。殆ど怪獣ものだったしな」

「それもありだね」

「そう考えるといいよ」

半ば強引にそういうことになってしまう小田切君だった。

「そういうふうだね」

「わかったよ。それじゃあな」

「そう考えるよ」

ライゾウもタロもそれで納得した。その間に天使達の両腕から放たれた光の帯がマスコットを直撃する。

それで終わりだった。マスコットは動きを止め次には派手に爆発して消えてしまった。その後に残ってたものは何一つとしてなかった。

「終わったわね」

「ええ」

先生達はそれまでマスコットがいた場所を見て微笑み合うのだった。

「これで地球は守られたわね」

「人類の平和は」

「それじゃあ天使さん達」

言い合ったうえで二人で天使達に声をかけるのだった。

「今回は有り難う」

「これは御礼よ」

こう言って彼女達に差し出してきたもの。それは。

チョコレートであった。白い何メートル四方もあるチョコレート。それを出してきたのである。

「巨大チョコレートですね」

「それもホワイトじゃな」

そのチョコレートを見て言う小田切君と博士であった。

「あれは」

「あれをあの天使達にやるのじゃな」

その通りだった。先生達は魔法でその巨大ホワイトチョコを上に乗かべさせそのうえで。天使達に渡したのであった。

天使達はそのチョコレートを受け取った。二枚あった。それで一人あたり一枚ずつ貰ったのだった。

「今回の御礼よ」

「よかったら食べて」

「ゆっくり！」

ここでもこう答える天使達だった。

そのチョコレートを受け取ってから天使達は去るのだった。額の赤と青に点滅するタイマーを輝かせながら。

六枚の翼を羽ばたかせそのうえで。彼女達は天に戻った。

「ゆっくり！」

最後の言葉もこれだった。これで一連の激しい戦いは終わったのだった。

「じゃあ今日子ちゃん」

「ええ、香織ちゃん」

二人の先生達はまた顔を見合わせて言い合う。

「晩御飯は何かいいかしら」

「懐石料理はどうかしら」

今日子先生はにこりと笑って今田先生に提案してきた。

「それはどうかしら」

「懐石料理ね」

「いいお店知ってるの」

そのにこりとした笑みでまた言う今日子先生だった。

第二十章

「だから。そこに行きましょう」

「そうね。じゃあそこにね」

こうして戦場から去っていく先生達だった。そしてモニターの前に残っている面々は。

「終わったな」

「そうだね」

まずライゾウとタロがこう言葉を交えさせた。

「さて、キャットフードでも食って風呂に入って寝るか」

「そうしようか。僕はドッグフードだけだね」

こんな気軽な話をしてその場を去るのだった。残ったのは博士と小田切君だった。

小田切君は暫く博士を見ていた。今回の騒動が完全に失敗に終わってしまったのでそのことについてどうやって何をするか見守っていたのである。

その博士はここで。こう言うのだった。

「それではじゃ」

「それでどうするんですか？」

「今からちよっと研究じゃ」

これが博士の言葉だった。

「ちよいととう」

「ちよいとって今からですか」

「そうじゃがそれがどうしたのじゃ？」

博士は全く何でもないといった言葉の返しであった。

「それが」

「今全部失敗したばかりですけれど」

「失敗は成功の母じゃ」

こんなことを言うのだった。

「気にすることはない」

「それだけですか」

「それだけじゃ。さて、次はじゃ」

全く気落ちしたことなく言うのであった。

「あのマスコットの一家をじゃな」

「そういえば一家でしたね」

小田切君はまた忌々しいことを思い出すのであった。

「あのマスコットって」

「それを全て開発するのじゃ」

また碌でもないことであった。

「そのうえでまたのう。巨大なものなりを作ってじゃ」

「それでやることは同じなんですね」

「再び古都に進撃じゃ」

やはり全く懲りていない博士であった。見事なまでに。

「やるぞ。早速な」

「それじゃあまた地下に籠られるんですね」

「うむ」

これについても当然といった口調であった。

「そのつもりじゃよ」

「早速なんですね」

「わしにとって休息なぞ何の意味もないことじゃ」

実に素っ気無く言っただけだったのであった。

「それではじゃ」

「今からですね」

「うむ、まあ二日で終わるじゃろ」

今回もその程度なのであった。

「二日程のう。籠っておる」

「じゃあ僕はその間は」

「留守番を頼むぞ。何なら代理で玄関に殺人口ロボットを置いておくのじゃ。研究所の全方位を防衛体制にしておいてな」

「じゃあとりあえずそうしておいて夜は家に帰りますんで」

「それでよい。それではな」

「ええ。じゃあ二日後に」

こう話して別れる二人であった。博士は全く懲りてはいない。そしてまたとてつもない騒動を引き起こすことになるのであった。誰も博士を止めることなどできないのであった。

発進！！最凶マスコットせん○くん

完

2009・8・22

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7859h/>

発進！！最凶マスコットせん○くん

2010年10月8日15時45分発行